

西アフリカにおける豆腐（3）

— 多様な名称と分布の謎 —

Tohu/tofu in West Africa (3)
its distribution and name varieties

中 村 博 一*

Hirokazu NAKAMURA

要旨：2013年に実施したナイジェリア11州とニジェール南部での広域調査から、特に豆腐名称とその分布に注目し考察を行った。従来の「アワラ」「クワイダクワイ」に加え「ワラ」「ガーラ」「ベースケ」の計5種類の語形を確認できるが日本で報道された名称「トーフ」は見いだせない。このうち「ワラ」「ベースケ」とフラニ・チーズ名称「アワラ」を新たに確認できたことで豆腐名称「アワラ」の語源をめぐる考えかたを変更せざるをえなくなった。フラニ・チーズ「ワラ」と同じ *Calotropis procera* の樹液を凝固剤に利用したことが豆腐「アワラ」に影響したと考えてきたが、むしろ食品自体の類似性が関係しており発生もナイジャ州であることが推測される。

キーワード：ナイジェリア、ニジェール、食文化、文化人類学

1. 緒 言

ニジェールにおける豆腐報告がH-hausaにもたらされてから11年が過ぎようとしている。20年前開発が行われたナイジェリアはもちろん、隣国のニジェール共和国そしてベナン共和国まで豆腐や味噌の存在が報告されてきた。さらにハウサが大豆や豆腐伝播の媒体となっているとの情報¹⁾からカメルーン等のハウサ語通用圏でも生産消費される可能性が想定される。

今回は半年にわたるナイジェリア北部ソコト滞在中広域調査を準備し、延べ1ヶ月かけナイジェリアとニジェールを約4000km移動した。名称、販売時間、販売方法、販売者、凝固法、大きさ、値段、味付け、食材の組み合わせ、地元の大豆加工品の情報等、多様な観点からのデータ収集を試みた。ある程度の空間的広がりをおさえておくことで定点観測がさらに充実すると思われる。

* なかむら ひろかず 文教大学人間科学部

ナイジェリアはソッコト、ケツピ、ナイジャ、クワラ、ナサラワ、ベヌエ、プラトー、カドゥナ、カノ、カツィナ、ザムファラの11州で観察およびインタビューを実施した²⁾。ニジェールは南部国境に沿って東のマラディから西の首都ニアメーまでを対象とした³⁾。

本稿では各観点のうち特に懸案であった名称をとりあげる。これまで当該地域の豆腐名称についての包括的情報はなかった。語形の把握とその広がり、エティモロジカルな解釈等、ローカルな食材として受容、日常化した側⁴⁾の文脈を知るうえで名称をめぐる考察は重要な手がかりとなると考えられる。この地域、特にナイジェリアにおいては国外から導入された製品が各地において独特な名前をつけられローカライズしていくプロセスがよく見られる⁵⁾。豆腐もまたトーフ以外の名前をつけられ地元の食材になっている。名称のバリエーションとその通用範囲を中心に考察していく。

2. 広域調査までの経緯と名称の問題

2004年時点でアワラ awara とクワイダクワイ kwaidakwai の2名称が確認できていた⁶⁾。これは H-hausa におけるドン・オズボーンのニジェール報告(2002年11月27日)がきっかけであった。H-hausa はハウサ語圏研究者の情報交換ネットワークであり、当初ハウサ語ネイティブをはじめナイジェリア各地⁷⁾のメンバーから寄せられた豆腐名称はアワラのみであった。ニジェールでの別名称の存在を示唆されたものの具体名についてメンバーもわからないままであった。その後ニジェールのビルニンコンニ地域の豆腐がクワイダクワイと呼ばれていることを知人の情報としてオズボーンが報告した。一方日本では複数のメディアによりトーフと報道されており⁸⁾、これら名称を確認するためナイジェリアのカノとソッコトで2004年に調査を実施した。これがわたし自身の最初の豆腐調査となった。その際ナイジェリア国内においてもクワイダクワイが確認できた。クワイダクワイはソッコト州周辺で流通することがわかり、アワラとクワイダクワイの境界が大豆生産の盛んなザムファラ州にある可能性がでてきた。さらにザムファラ州でこれら以外のガーラという名称の情報も最近あり⁹⁾、トーフも含めたより広域にわたる確認の必要が要請された。

3. 概要

2004年の集中的な調査から9年を経たこともあり、分布だけでなく名称の知識についても注意することにした。2004年においてカノでクワイダクワイが知られておらず、またソッコトの地元民はアワラについてほとんど知らなかった。しかし2013年現在は名称の相違や多様性について多くの話者が認識しているため、複数の名称のうちどれが最も使われているか優勢なのかを確認する必要があった。また当該地域で他地域出身者が豆腐を商っている例もあり、確認しながら調査をすすめた。なお、名称が違っていても食べもの自体としては「みんな同じ Duk guda ne」という返答が大多数であった。これについては別の機会に報告したい。

今回確認できたのはこれまでの「アワラ」「クワイダクワイ」に「ワラ wara」「ガーラ gaala」「ベースケ beeske」の3つを加えた合計5名称である¹⁰⁾。ワラとベースケはまったく予想していなかった。優勢な語形を確認しながら調査行を続けた結果、分布は図1のようになった。

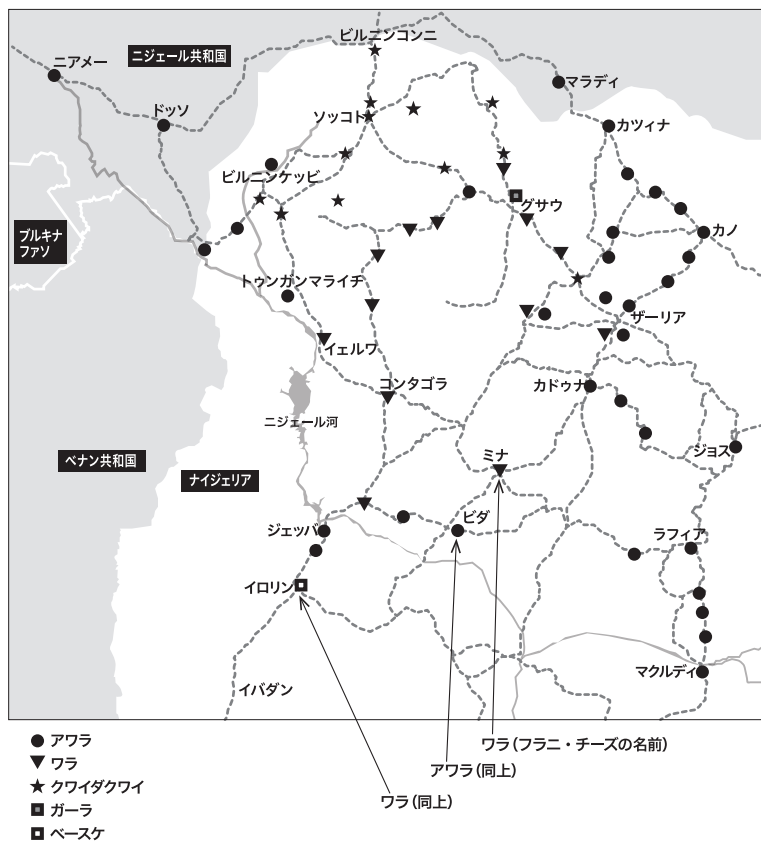


図 1

アワラは通用域がもっとも広く、他の名称を囲むような分布を示した。クワイダクワイはやはりナイジェリア北西部ソッコト州中心の分布になった。その東側はザムファラ州においてアワラとなり西側もニジェール国境に近づくアワラとなった。新たに確認された名称ワラの分布はクワイダクワイ地域の南に広がる形となっており、ケッビ、ナイジャ、ザムファラ3州の一部を含む。ワラの南側ではまたアワラにもどった。西側のニジェール河付近もアワラ、ナイジャ州東側もアワラである。ガーラはピンポイントでザムファラ州都グサウ付近に限定された。ベースケはクワラ州都イロリンのみのデータとなったが、これは悪路により移動をあきらめたからである。ガーラと異なり南のイバダン方面に広がっている可能性がある。以下各名称について関係する順に述べてみる。

4. アワラ

他の名称が使われる地域の多くの話者もアワラを知っている。このためもっともポピュラーな形と言えるであろう。さらに分布の広がりから推測すれば最も古い語形と考えられよう。

今回はクワイダクワイの西側部分のアワラ情報がえられ分布の注目すべき点が浮かんできた。上述のようにクワイダクワイはソッコト州周辺で優勢であるが、西隣のケッビ州都ビルニンケッビ周辺とニジェール共和国ドツソ南方の3国（ニジェール、ベナン、ナイジェリア）国境付近の

町カンバ（ナイジェリア側）でアワラと言っている。従って①ニジュールから逆輸入されたか、②もともとアワラが広まったところにソッコト方面からクワイダクワイが拡張したか、二つの可能性が考えられる（どちらにしてもベナンでのアワラの広がり十分予想される）。

またアワラの起源についても新展開があった。中村 2011 ではヨルバ語でワラとされるフラニ・チーズからアワラが派生したと考えた¹¹⁾。フラニ・チーズは民族分布よりかなり狭い範囲に限定される食材であり、ナイジャ州あたり¹²⁾が北限と考えられる。ソッコト、カノ、ザムファラ、カツィナ各州では酸乳を日常的に売っていてもワラのようなチーズは見られない。ソッコト在留のヨルバ人にワラをたずねてもはっきりしない。そうした食材がなぜ豆腐の名前に影響したのか。イバダンでの豆腐開発においてフラニ・チーズと同様の樹液が凝固剤として利用されたこと¹³⁾、普及活動で豆腐がソイ・「チーズ」とされていたことにわたしは注目してきた¹⁴⁾。

今回の調査ではフラニ・チーズそのものをアワラと呼ぶ地域（ナイジャ州ビダ）が確認でき、クワイダクワイの豆腐と卵のように豆腐自体とフラニ・チーズとの類似が名称に関わる可能性が浮かんできた。2002年のH-hausaの議論でカノ出身のイブラヒム・ハムザがアワラの起源として「ヨルバ語のオワラ owara」をあげていたことを考えると納得がいく¹⁵⁾。ヨルバ語の権威であるエイブラハムの辞書はワラおよびワランカシをチーズとしており¹⁶⁾、ハムザの報告したオワラは当時確認できなかったが、今回の資料により豆腐＝アワラの語源をめぐる議論にある見通しがみえてきた。

5. ワラ

同様にワラはこれまでフラニ・チーズの名前としてのみ認識していた。IITAの報告書や新聞等さまざまな情報から「ワラ：アワラ＝チーズ：豆腐」と思い込んでおり、これ以外の図式をまったく想定していなかった。ところがアワラが豆腐にもチーズにも用いられる地域がみつき、さらに驚いたことにワラについても豆腐とチーズを同様にワラと呼ぶ話者がナイジャ州ミナにおいて現れた。ここで気になったのは同じ名称で混乱しないかという点である。UDUの社会言語学者サーリス・ヤカサイ教授も同様な見解を示したが¹⁷⁾、ミナの話者によれば大豆のワラと牛乳のワラで違うので問題はないという¹⁸⁾。

6. ベースケ

上で述べたようにアワラとワラ地域それぞれで豆腐とフラニ・チーズが同じ名前になる場所を見いだせたが、今回フラニ・チーズを実際確認したのはイロリンからミナの範囲であった。中でもイロリンのパタ市場付近の路上でフラニの女性たちが多様なチーズを商っており、写真のような水に浮かべた白い生のチーズ以外に赤く色づけしたのや厚揚げによく似た揚げチーズも



フラニ・チーズ（クワラ州イロリン パタ市場）

ワラとして売られていた¹⁹⁾。ところがイロリンの豆腐名はまったく異なり、ベースケと呼ばれていた。その後ベヌエ州でベースケは英語ビーンズケーキ beans cake²⁰⁾ に由来すると指摘を受けた。今回イロリンには北方のコンタゴラ方面からニジェール河をわたりジェッパ経由で入ったがジェッパ付近の豆腐はアワラと言っているの、イロリンから南のヨルバランドにかけてもアワラでなくベースケと呼ばれるかどうか、これについては今後の調査を待ちたい。可能性はあると思われる。

イロリンより 150 キロ南のイバダンを知る研究者からの情報によると豆腐は日常的に身近で見られる食材ではないようだ。確認の必要があるが、IITA の 1998 年の年次報告は特に明確に地域を限定せずに豆腐の普及について述べていた²¹⁾。このため IITA のあるイバダンで容易に豆腐が手に入るようにこれまでわたしには読めたこと、アワラ名称の発生もイバダン周辺と思いついていたことを付記しておきたい。

7. アワラ・ワラ・ベースケ

今回わかった 5 名称のうち英語起源と考えられるのはこのベースケのみである。そしてベースケと呼ぶイロリンではフラニ・チーズをワラと言っている。イロリンの北東 250 キロにあるナイジャ州ビダでは豆腐もチーズもアワラ、さらに 90 キロ北東の州都ミナではどちらもワラと呼ぶ。こうしたことから豆腐名称のアワラやワラの発生地についても推定ができるだろう。つまりアワラやワラはナイジャ州で生まれ広まった可能性があるということだ。また仮に、イロリン南方のイバダンを含むヨルバランドで豆腐名称がベースケであるとするなら、フラニ・チーズ生産がいくら盛んであってもまた名前をワラと言っているとしても豆腐とチーズはあまり接点のない異なる食材として普及した可能性が考えられるだろう。

しかしナイジャ州ではなぜアワラとワラの 2 種類が存在するのか、普及年代の違いなのか、今回の調査では解明できなかった。

8. クワイダクワイ

2 で述べたようにアワラ以外の豆腐名称について最初に言及したのはオズボーンである。その後キット・オコンナーからの伝聞としてビルニンコンニ地域でクワイダクワイと呼ばれているとした。この時、卵の白身との関連も推測している²²⁾。中村 2011 ではイバダンで開催した試食会で「卵よりおいしい」と言われた中山修氏の情報とわたし自身の日本国内の山村調査での天神の禁忌によりゆで卵を食べたことがなかった高齢者がおいしい豆腐と言った語りを引用し、ハウサ語の卵クワイ kwai (複数形 kwayaye) に由来する(「卵と卵 kwai da kwai」の)可能性を指摘したが²³⁾、この語源に関する決定的証言や資料はえられていない。

今回の調査ではクワイダクワイの通用範囲がかなり特定できた。ナイジェリアのソッコト州を中心に北はニジェールのビルニンコンニ、南は(ソッコト、ケッピ、ザムファラ) 3 州境付近のザムファラ州側グンミ、西はケッピ州都ビルニンケッピ、東はザムファラ州タラータ・マファラー付近までとなった。さらに東のザムファラ、カツィナ州境付近で一カ所クワイダクワイが出たが分布を考えると例外と考えられる。

9. ニジェールのアワラとクワイダクワイ

今回ニジェール側の調査に際しくワイダクワイとアワラの通用圏を現時点で確認する作業が第一の課題であった。入国直前にアリート、アガデスで襲撃事件が起こったため北部方面を避け、非常事態宣言中のナイジェリア北東部3州や5月に襲撃事件のあったカツィナ州ダウラ（ナイジェリア側）に近い町ザンデルより東部方面の調査もあきらめざるをえなかった²⁴⁾。資料を集められたのは最東でマラディ、250キロ西のビルニンコンニ、さらに300キロ西方のドツソ、首都ニアメーについてである。マラディとニアメーは約700キロ離れている。

現在もマラディ、ドツソ、ニアメーはアワラ地域であった。クワイダクワイを知る売り子や住民には出会わなかった。一方、ビルニンコンニはオズボーン報告から11年経ているがクワイダクワイが今も優勢である。

当時の報告には西方のドツソ、ニアメーについての言及はなかったが、オズボーンは未確認ながら2004年3月以前にニアメーを含むいくつかの市場で豆腐が売られていたとしている²⁵⁾。2002年当時ビルニンコンニの豆腐は東のマラディやザンデルより新しいと述べていたので、もしも同時期ドツソ、ニアメーに豆腐がなかったとすればその後これら地域に普及した豆腐がクワイダクワイと呼ばれる可能性もあったろう。ともあれソッコトービルニンコンニからニアメーへの人の移動も見られる中、ニジェールでなぜクワイダクワイがビルニンコンニ付近に限定されるようにみえるのか。他地域ではやはりアワラがより古く、東からの流通が強力だったと考えられようか。

現在ビルニンコンニの話者はアワラも知っているがどちらが優勢かたずねると「クワイダクワイ」と答えが返ってくる。数キロ離れたナイジェリア側ソッコト州の町イッレラの市場ではクワイダクワイと言っている²⁶⁾。ビルニンコンニがソッコト州と隣接し、国境越えの要所としてソッコト市から北上するルート沿いにあるため、アワラが一般的なニジェールにあって（これまでのところ）唯一クワイダクワイが使われると考えられる。ナイジェリアの好況を背景にラゴス方面からソッコトービルニンコンニ経由でニジェールを目指す企業家も今は多く、2013年9月にソッコト州政府とIBFC²⁷⁾によるイッレラの大規模国際国境市場の構想も発表されている。物流の拠点としてこの付近は今後ますます吸引力が増加すると予想される。クワイダクワイがアワラ地域に進展する可能性が十分あるかもしれない。

ただアワラとクワイダクワイの時間的深度を考えると中村2011で述べたようにニジェールへの到達ルートが少なくとも二つあったことが推測される²⁸⁾。1として2004年の調査においてソッコトの話者の間でもクワイダクワイは新しい食材（登場から5、6年）という認識があったこと。2としてカノのアワラがクワイダクワイより古いとソッコト在住のカノ出身者が述べていたこと。3として今回もビルニンコンニの話者の一部がクワイダクワイは新しいと言っていること。4として西方の首都ニアメーの売り子が大豆もアワラもハウサがもってきたと言っていること。これらと分布のありようからアワラはカツィナーマラディ方面からニジェールに広まり幹線沿いに西進し、後にソッコト方面からクワイダクワイが国境をわたってきてアワラ圏に突き出た形になったと考えられる。少なくとも名称としてはこのようであるものの、食べものとしてははじめに東方から現れたと思われる。イッレラを含めソッコト周辺で特徴的なトマトダレでしっかりあえたタイプがビルニンコンニで見られないことも証左となろう。オズボーンによると2000

年末ピースコープ（平和部隊）のボランティアがマラディおよびビルニンコンニの市場で豆腐が販売されていることを記しはじめたという²⁹⁾。マラディにはマダルンファ経由で、ザンデールにはマタメイエ経由で2年（～2002年）の間に普及したとする。これらはいずれもトウガラシを振りかけて売られていた³⁰⁾（トマトダレの記述がないことも注目したい）。ナイジェリアにおいて開発の中心にいた中山修氏が1998年にナイジェリアを再訪した際北部カノの路上で揚げ売りをする女性を確認していることも補強資料となるだろう。マダルンファとマラディはカノとカツイナを結ぶ幹線の延長上に位置するからである。

10. ガーラ

事前にザムファラ州都グサウでの豆腐名と知っていたのがガーラである。かなり広がりがあると想定していた。ところがグサウを離れるとすぐにワラないシアワラ地域となり、ほぼグサウ付近に限定される極めて興味深い分布となることがわかった。アワラとクワイダクワイの境界について以前グサウで話を聞いていたときガーラを耳にしたことはなく、この3年ほどの間に知った名称である。当然その発生はもっと古いと思われるが、少なくとも分布自体からは後発の名称と考えられる。

啓蒙普及活動が影響している可能性や影響力のある人物が導入した可能性もあるが語源ははっきりしない。地元で意味について聞いてみたが「わたしたちはガーラと言っているから」と典型的な回答しかえられなかった。以前カノで豆腐を取材させてもらった話者は、路上で「ガーラ、ガラ、ガラ」と叫びながら売るスナック由来ではないかと語った。ハウサ語で「わたしは安くそれを手に入れた Na same shi a gala」という表現での gala は「安い」「容易である」ことを意味する。豆腐導入の理由にもつながることから、ここからガーラが来ている可能性を考えてみたものの音調が異なっており不明のままだ。また、グサウから60キロ北上した商都カウラナモダ周辺はワラないシアワラが優勢であるが、今回ここでサツマイモと豆腐を混ぜた料理を売り歩く少年と出会った。食べものの名前は「シャーラ shaala」であり、この話を聞いたソッコトの知人は「商売人でものだ（売るためにどんな名前でもつける）」と笑ったがガーラと関係するかもしれない。今後の確認作業が必要である。

11. 結 語

本稿では2013年の広域調査をもとに5つの名称と分布についてはじめて報告ができた。特にこれまで知られていなかったワラとベースケは継続調査に直結する（すぐに取りかかれる）有力な情報である。ナイジャ州およびケッピ州南部、カドゥナ州南東部でのワラとクワラ州イロリン南側からイバダン方面のベースケの分布調査が期待されよう。

さらにこれまでアワラとワラについてアワラが豆腐名でワラがチーズ名（語源となるフラニ・チーズのヨルバ語名）であり、アワラはワラから派生したと考えてきた。同じ凝固剤が使われていることが根拠であった。しかし豆腐とフラニ・チーズ双方をアワラないしワラとする事例がナイジャ州でえられたことでクワイダクワイにおける豆腐と卵のように食品そのものとしての類似性があらためて見えてきた。今回の広域調査の一番の成果であろう。実際に揚げたフラニ・チー

ズは色も食感も当該地域で一般的な豆腐である厚揚げと似ている。名称の発生も分布からナイジェラ州内であることが推測できる。

クワイダクワイについてはほぼ全体があきらかになったといえよう。ただニジェール国内の調査はいまだ不十分であり、国境線にそった地域や北部タファ方面の町村の細かいデータが必要である。ガーラについては通用地域がグサウ付近と特定できた。語源的な検討と時間的深度の測定が今後の課題である。日本で大きく報道されたトーフの名前は一度も聞くことができなかった。これも貴重な情報となろう。可能性としては開発の行われたイバダン周辺が残っている。中村 2011 で想定したベヌエ州では大豆生産が盛んであるものの豆腐よりも大豆ベースの粥や「アパバ akpukpa」がポピュラーであり³¹⁾、トーフという表現は聞けなかった。

また今回ハウサ語圏の北東部 3 州を避けざるをえなかったが、この地域はカヌリ人の地元である。数少ない情報として弘前大学のジョン・フィリップスがザーリアの友人宅での伝聞としてカヌリ（北東ナイジェリア）には豆腐は広まっていないと 2004 年に報告している³²⁾。その後 9 年の間に豆腐が広まったとすれば国境を越えて北カメルーンでも豆腐を見つけられるかもしれない。ボーコー・ハラームの終息を待たなければならないだろう。

同様に今回避けざるをえなかったナイジェリア南東部について。リバーズ州やイモ州出身の知人、今回の調査行で出会った人々によれば豆腐はないという。豆乳については多くの人々が語るが、市場で豆腐が売られている可能性があるにしても日常食ではないようである。こちらも時期をみながら確認する作業が必要であろう³³⁾。

最後にフィールドワークをもとにしたデータから考察を試みたが、IITA や IDRC 側の資料を再度参照しながら今回のマッピングとの一致やずれを探る必要があるだろう。こうした作業がさらなる問題を浮かびあがらせまた研究を進めるモメントともなるだろう。

本稿では特に名称を中心に扱ったが、他の諸観点については別に論じてみたい。

註

- 1) ザルマ人売り子 F の指摘（ニジェールの 2013 年 5 月調査）
- 2) インタビューは基本的にハウサ語で実施した。
- 3) 調査はナイジェリア北東部と南東部、ニジェール北部を除いて実施した。ナイジェリア南西部イロリン以南については悪路により断念し、次回以後ラゴス～イバダン方面から再調査することとした。在外研修の機会を与えてくださった文教大学および調査の安全面に深く配慮いただいた UDU 社会科学部社会学科、移動中の武装強盗・襲撃等の危険から守ってくださったハルナ・ウスマン氏に感謝申しあげる。
- 4) 当該国の専門家でもなく毎日生産消費する場を生きる人々（およびその利用のありかた）。
- 5) バイクタクシーやトリサイクル（いわゆるリクシャ）の名称もそうした例である。
- 6) 中村（2011）「西アフリカにおける豆腐（1）：多様なローカリゼーション」『生活科学研究』33 123-33 頁
- 7) カノ（カノ州）およびジョス（プラトー州）。
- 8) 例えば「編集手帳」（『読売新聞』2001 年 3 月 13 日東京朝刊 1 面）、「アフリカの豆腐（大豆が変える 3）」（『朝日新聞』2002 年 7 月 26 日朝刊 3 面）参照、開発の中心にいた中山修氏からも同様のお話しをうかがった（2007 年 10 月 20 日のインタビュー）。
- 9) ソッコト市内の調査における生産者女性 A の指摘 「グサウではガーラって言うでしょ Ka gani a Gusausuna cewa gala」（2011 年 2 月 23 日）
- 10) ” は低音調。

- 11) 中村 (2011) 126 頁 ドン・オズボーンの見解も同様である。「豆腐に関する普及した名称 (アワラ) はナイジェリア、ベナン、トーゴで一般的な未熟成チーズであるヨルバ語のワラに由来するとわたしは理解している」H-hausa、2004 年 9 月 17 日付投稿 (<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=H-West-Africa&month=0409&week=c&msg=a1ukn8xYdCyz8BaXw7xhg&user=&pw=>) 2014 年 1 月 20 日閲覧
ワラは確かにヨルバ語辞書に載っているが、ヨルバランドでフラニ人が作り販売するワラをヨルバ語と言いついていいのか、この疑問はいまだ残る。
- 12) ナイジェラ州に隣接するケツピ州とカドゥナ州の一部も含められよう。
- 13) *Calotropis procera* bombom tree; sodom apple ハウサ語では tumfafiya。今回の調査ではこの樹液を凝固剤としている例をまったく見出せなかった。現在では穀物の発酵液が主流となっている。
- 14) 前掲 同所
- 15) H-hausa、2002 年 11 月 30 日投稿「大豆の豆腐のハウサ語名称はアワラでありヨルバ語のオワラから借用されたのだと思う」(<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=h-hausa&month=0212&week=a&msg=NW4%2BmqiPCI5BQWOrsMwjcg&user=&pw=>) 2014 年 1 月 8 日閲覧
- 16) Abraham, R. C. 1958 *Dictionary of Modern Yoruba*. University of London Press.
- 17) ソッコトでの会話 (2013 年 9 月)。
- 18) 豆腐とごま豆腐のように材料が異なっても豆腐と言う例をわれわれは知っている。
- 19) 煮て乾燥させたチーズもあるという。これもワラである (イロリンの M 氏情報)。
- 20) はじめ英語起源のハウサ語ビスケ biske (ビスケット) を想起したが、ベヌエ州マクルティでのインタビューにおいて指摘を受けた (2013 年 8 月)。あるいは beans curd の可能性もあるだろうが英語起源であることに異論はないと思われる。
- 21) <http://www.iita.org/info/ar98/9-10.htm> (2004 年 5 月 29 日ダウンロード)
- 22) H-hausa、2002 年 12 月 23 日付投稿 (<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=H-Hausa&month=0212&week=d&msg=sNpxLIAClqqr2RTPLs9IIA&user=&pw=>) 2014 年 1 月 20 日閲覧
- 23) 中村 2011、127 頁
- 24) ニジェールのアワラとクワイダクワイの関係については北部 (タファア、アガデス) の確認も必要と思われる。状況が好転すれば実施してみたい。
- 25) 私信 (2014 年 1 月 11 日)
- 26) 2004 年調査
- 27) International Business Finance Corporation of Nigeria (ナイジェリア国際企業金融公庫)
- 28) 中村 2011 ではビルニンコンニのクワイダクワイの確認がとれておらず、東方からのルートの可能性について述べた。
- 29) 私信 (2014 年 1 月 11 日)
- 30) H-hausa、2002 年 12 月 3 日付投稿 (<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=H-Hausa&month=0212&week=a&msg=EZ7KIDNrRzT%2B0rUxaZ6nsg&user=&pw=>) 2014 年 1 月 18 日閲覧
- 31) 中村 2011、125 頁。アブパはティブ語でいわゆるモイモイ、ハウサ語のアララ alala である。ササゲが主流であるがバンバラ豆や大豆を混ぜ込んだアブパもある。ベヌエ州都マクルティの地元民によれば豆腐はハウサが市場で売っておりアワラ圏であるが、ローカルな食材ではないようである。日常的大豆食としては粥 (おそらく濃い豆乳でつくる) を飲む。食堂や路上では手に入らないという。
- 32) H-hausa、2004 年 9 月 16 日付投稿 (<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=H-Hausa&month=0409&week=c&msg=3xHtqrZK6CStzQ1Nnx1Yqw&user=&pw=>) 2014 年 1 月 20 日閲覧
- 33) 土地勘がなく、誘拐事件の多発が懸念されたため今回この地域を避けた。